

20歳の訪問看護

西区訪問看護ステーションが20周年を迎える。

ふだん、医者が看護のことを考えることはあまりない。しかし、看護という職業は医師よりも古くからあり、医療の土台のようなものである。その大切さを認識し看護的まなざしを少しでも備えている医者は、そうでない医者とくらべ患者への接し方が異なる。

医者は、科学的なまなざしで、疾患（disease）の診断をする。丁寧に問診し、正確に所見をとり、必要な検査をする。そして、医学的根拠に基づいた治療を施す。しかし、これだけではそのひとを診ていることにはならない。というのも、患者が実際に体験している病（やまい）は、医者がそこにみている疾患とは別のものだからである。患者はまず感じる、恐れや不安を。そして考える、じぶんの病気を命をおびやかすかもしれぬものとして。患者は生活のなかで困っている、病気のために例えば子どもの食事がつぐれないことを。患者は期待している、医者がこれらをわかってくれることを、その上ですべてを解決してくれることを。これが患者の体験する病（illness）である。

医者は、飽くまで科学者の眼で患者の疾患に向き合いながら、同時に患者の体験している病の世界に入っていかなければならない。この病の世界に入っていくとき必要なのは、病む者に寄り添う看護的まなざしである。

医者のまなざしと看護師のまなざしは、双方で補いあいながら医療を支えている。言いかえると、良質な医療には医者のまなざしと看護師のまなざしの両者が必要なのである。

さて、訪問看護は、病院看護が主として医者の補助的役割を業務とするのに対して、在宅患者の病の世界を理解し、その生活に添い、療養の世話をする。往診医の行き届かない点を、きめ細かいケアで補う。介護する家族の負担を知り、その苦しみに耳を傾ける。訪問看護は、医療と介護の両者と連携をとり、在宅医療全体の要（かなめ）の位置にあるといえる。

長生きをすることが不幸につながるような社会はおかしい。在宅医療は、こんな社会をかえていくちからを持つだろう。

私たち医師は、ステーションの20年の歴史と実績を評価するとともに、これからもよりよい在宅医療をめざして、たがいに学びあい協力していきたいと思う。